

## 伝統的な地場産業、仁方のやすりを探る

澤崎 裕太

### I. はじめに

広島県南西部に位置する呉市。瀬戸内海に面した気候温暖で自然環境に恵まれた都市である。仁方はその呉市の東端に位置する。仁方ではやすりの生産量全国シェア95パーセントを誇ることから、「仁方のやすり」と称されるほどやすり産業が盛んである。昭和になって仁方に作られたやすり工業団地では、現在50社近くがやすり製造を行っている。仁方で

のやすり産業がいつ頃から始まったのか。現在のやすり産業の様子はどうであるのか、やすり会社への聞き取りや統計資料を中心にまとめ、仁方のやすりについて現状を把握するとともに、そこからやすり産業のこれからを考察していく。

本調査ではやすり工業団地を中心にやすり会社7社と広島地区<sup>やすり</sup> 鑪協同組合の方々にお話を伺った。

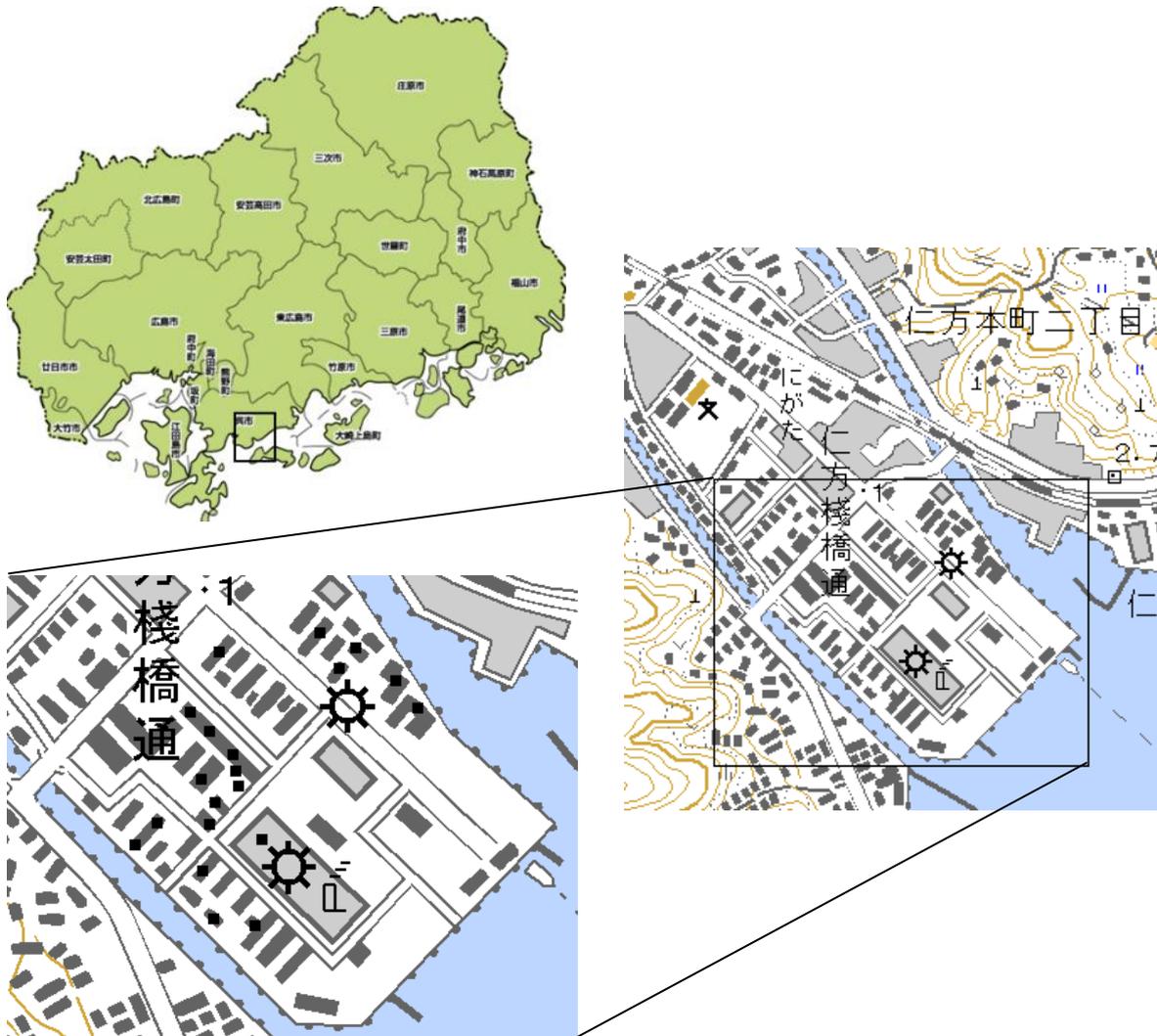


図1 仁方の位置とやすり工業団地周辺におけるやすり工場の分布

## II. 仁方やすりの歴史

2010年現在、全国シェア95パーセントを占めるやすり産業であるがいつ頃から仁方のやすり産業が始まったのか。また、どうして仁方でこれほどまでやすり産業が発展・拡大したのか明らかにする。

仁方にやすりが伝わったのは江戸時代末期の文政年間である（「広島文化大百科ホームページ」）。仁方の一町民が大阪から製造技術を習得し、他の住民に伝授したのが仁方やすりの起源であると伝えられている。この町民は金谷弥助、嘉平次、梶山友平など諸説ある（「呉市史」「仁方郷土誌」）。

仁方はデルタ地帯にあるため肥沃な土地で農業が盛んに行われていた。同時に農鍛冶も盛んであり、やすり産業が伝わったとき、その技術を受け入れることのできる職人が多く存在していた。また原材料である島根県の安来鋼（玉鋼）<sup>やすきはがね たまはがね</sup>を河川を利用して運搬するルートが確立していた、更にやすり製作過程の焼入れの際に冷却水に石灰を混ぜて使用するそうであるが、その為に必要な石灰岩が近くの白岳山で採れたことなども、仁方にやすりが根付く要因になったと考えられる。

1867（慶応3）年に大阪で製造技術を習得したとされる梶山友平は、もともと刀鍛冶であった。彼の刀鍛冶の知識・技術はやすりを仁方に普及させるのに役立ったと伝えられている。梶山友平は、大正初期頃に仁方にやすりの母材が作れる工場（圧延工場）を建てた。圧延工場の存在も仁方でやすりが発展・拡大していくのに大きな役割を果たしていた。梶山友平がやすりを大阪から伝えた町民か否かに関わらず、彼の存在が仁方やすり発展の鍵となっていたのは間違いない。

戦前までは新潟・東京・大阪など他の産地でもやすり作りは盛んであった。しかし、戦災を受け衰退した。仁方は被害が少なかった

ためやすり産業は生き残った。昭和41年には仁方湾を埋め立て、やすり工業団地を造成した。それまでは民家と隣接した工場でやすりを製造していたが、騒音・工業廃水などの公害を防止すべきだとの声が高まり、地域との共存を図るためにも新しい工場造成地へ移転した。現在やすり工業団地では50社近くの会社がやすり製造を行っている。

## III. 仁方やすりの現状

金属を手作業で仕上げる際に使用される鉄工やすりの中には、目の粗さの違いから粗目やすりや中目やすり、油目やすりなどがあるが、その中で中目やすりが日本で一番消費されている。しかし、中目やすりは中国の低品質・安価なものが大量流通しており、ディスカウント価格が一般的な価格になってしまっている。

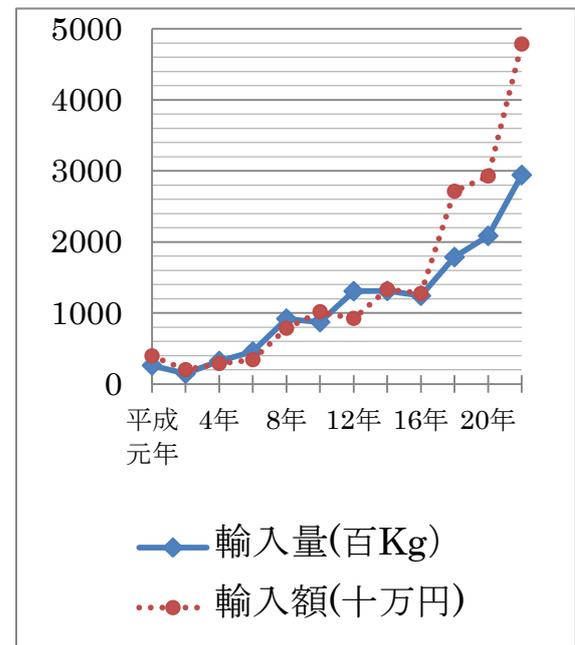


図2 日本の中国やすりの輸入量・輸入額の推移（出典：財務省貿易統計）

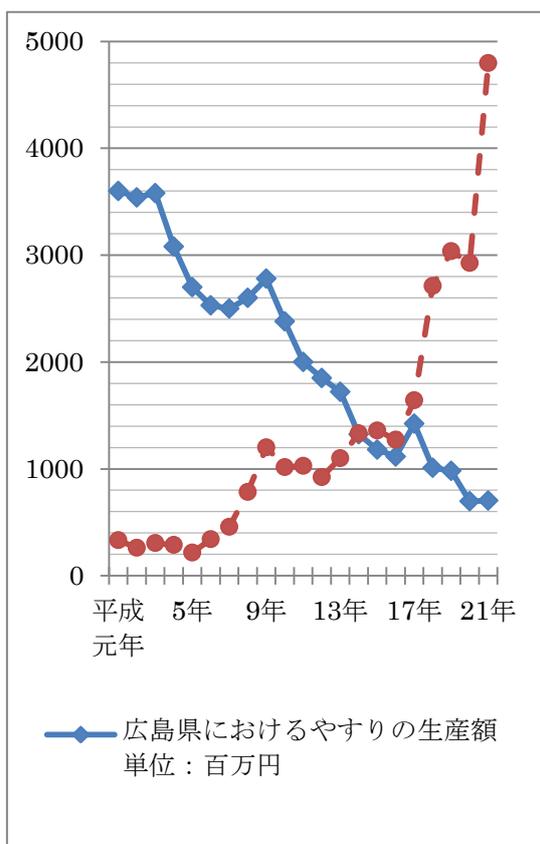


図3 中国からの輸入額と広島におけるやすり生産額の比較 (出典：経済産業省工業統計)

図2より平成8年頃からだんだんと中国からの輸入量・輸入額ともに増加している。平成16年以降は特に伸びが多い。平成元年と平成22年を比較してみると、輸入量・輸入額ともに10倍以上になっている。

図3から広島におけるやすりの生産額(仁方やすりの生産額)は年々少しずつ減少している。中国からの輸入額とは対照的である。ここからも中国からの輸入量増加が仁方やすりの生産量に影響を与えているのではないかと推察することができる。

仁方のやすり会社の対策としては、油目やすりなど、少量消費の商品や組やすりを製造、販売することで生計を立てているのが現状である。

やすり工業団地を中心にやすり会社7社に中心に力を入れて製造している製品は何かを伺った。一番多く製造されているのは組やすりである。組やすりとは、機械器具の細かな部分を手作業で仕上げる際に使用されるもので、12種類もの断面形状の種類がある。その断面形状の組み合わせにより5本組、8本組、10本組、12本組が規定されている。

その次に多く生産されているものは両刃やすりである。両刃やすりは主に、のこぎりなどの目立てに使用されるものである。中目やすりと回答した会社は一社もなく、やはり大量に売れても採算が取れない、価格では中国と勝負していくことは難しいと考えているようである。

機械の精密化がすすみ、機械部品のバリ取りに使われていたやすりが使われなくなってきたこと、またダイヤモンドやすりや精密やすりを生産する割合を増やしている会社も多く、やすり会社の中には完全に移行した会社もあるとのことであった。

伝統的なやすりである鉄工やすりや組やすりにこだわり昔からのやすり一筋で続けている会社もある一方で、ダイヤモンドやすりなどの新しいやすりも取り入れながら存続を図っている会社もあり、同じやすり会社の中でも考え方に偏りがある。

#### IV. 卸し先・輸出先

やすりは主に問屋を通してホームセンターやマツダなどの自動車工場等に卸されている。海外輸出を行っている事業所もあった。やはりメイドインジャパンという名を求めてくる客も少なくないようである。そういう点でも仁方のやすり産業は日本に誇

る産業の一つであると考えることができる。輸出先としては挙げられたのは中国や東南アジア、中にはアメリカにも輸出している工場もあった。

## V. 従業員

やすり産業の全盛期には120社やすり会社があり、4000人もの従業員がいた。平成11年には企業数は53社（内やすり組合員36社）、従業員数は424名にまで減少した。やすりの生産量の減少に伴いやすり産業に関わる従業員数も減少してきている（図4）。

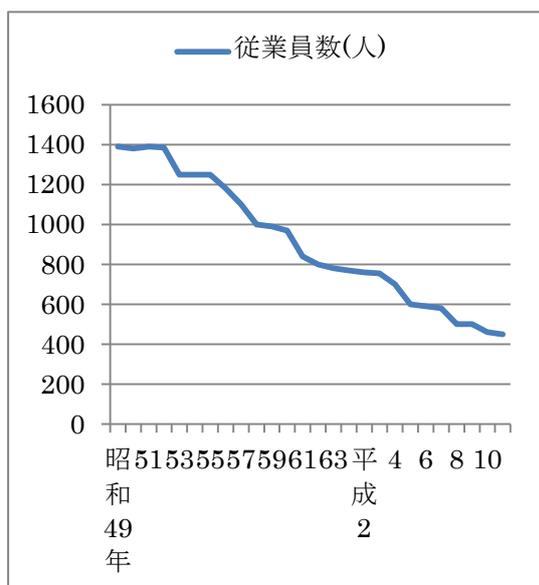


図4 仁方における全従業員数の推移（やすり組合員のみ）

また従業員の高齢化も進んでおり、平均年齢は男性従業員が50.9歳、女性従業員が53.5歳である。特に仁方やすりの特徴である味噌を用いた焼き入れをする、焼き入れ工の平均年齢は高く、58.4歳である。さらに実際に焼き入れができる職人が少なく、焼き入れを委託している会社も少なくないとのことであった。

## VI. やすり組合の取り組み

やすり組合のやすりを広く知ってもらうための取り組みとしては毎年、小・中学校でやすり体験（竹トンボ作りなど）を行い、少しでもやすりに興味を持ってもらう機会をつくっている。また、技術革新を考え実行しようと励んでいるが、大きな成果は挙げられていない。機械化・外国人労働者雇用も考えているようである。しかし、機械化は資金的な面から実現が難しいということ、外国人労働者雇用は技術を完全に教える前にそれぞれの国へ帰ってしまうために、あまり効果が期待できないであろうということで、実行されてはいない。

呉市からは昭和48年より呉市やすり企業復興条例に基づいてやすり組合へ助成金が出ているが、その用途は具体的には指定しておらず、やすり組合の運営に利用することしか述べていない。この助成金とは別に財団法人くれ産業復興センターの地域産業活性化支援補助金等を利用している工場もあるようだ。

やすり組合が中心となって技術開発等に取り組んではいるものの、あまり成果が得られていないということから、現在は毎月の生産・輸出のデータを取りまとめて、役所へ提出する窓口的役割の方が強くなってしまっているように感じた。

## VII. 問題点・課題

近年やすりの使用量自体が減少しており、それとともに町工場などの腕のあるユーザーも減少している。これまではユーザーの生の声を聞き、それをもとに改善・改良を行ってきたが、それもままならず、やすり

産業は停滞状況にあるということであった。

また、従業員の平均年齢が高く、若い人が少ないという後継者問題もある。職人の技術を身につけるには時間がかかるので、一刻も早く後継者を見つけなければならないが、技術を後世に伝え、残すために取り組んでいる会社はあまりなかった。後継ぎを探さずに自分たちの代で会社を終わらせてしまおうと考えている人もいた。後世に残ってもらいたいと思っはいるが現状ではなかなか難しいと考えているようであった。

## VIII. まとめ

今回の調査により仁方のやすりは全国シェア 95 パーセントではあるもののその見通しは決して明るいものではないということが明らかになった。しかし、やすり会社各社が各々独自の方法で乗り越えようとする努力も見られた。ダイヤモンドやすりや精密やすりを交えつつやすり製造を続けている会社や組やすりのみを製造する会社などがあった。現代のニーズにこたえるためにクラブト用のやすりなどに力を入れる工場もあった。

やすり使用量が減少する今、ニーズに対応したものを作っていくことが非常に大切である。昔からの製作技術を残しつつ現代の技術も取り入れ新しい仁方やすりが生まれる

日も近いのではないかと思う。そのために厳しい状況ではあるが今以上に技術開発・後継者育成等にやすり組合を中心に力を入れる必要がある。また、やすり産業全体が仁方やすりを後世に伝えていきたいという一つの考えを持ってまとまっていくことができれば、よりよい方向へと向かっていくのではないかと思う。これからの仁方やすり産業を期待を持ちながら見続けていきたいと感じた。

## 謝辞

この報告書作成にあたって、お話を伺った広島地区やすり協同組合を中心とするやすり工場のみなさまにこの場を借りてお礼申し上げます。

## 参考

荻山信行 2010. 『改訂 やすり読本』p. 103  
～p. 145

財務省貿易統計

<http://www.customs.go.jp/toukei/info>  
経済産業省工業統計

<http://www.meti.go.jp/statistics/tyo/kougyo/index.html>

ヤスリホームページ

<http://www12.ocn.ne.jp/~yasuri/>

呉市ホームページ

<http://www.city.kure.lg.jp/index.html>